



ち いき 地域が つながる プロジェクト

誕生までの道のりと 2020 年度の活動の記録



NPO法人

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

2021 年 3 月 31 日

目 次

はじめに～報告書の趣旨～	1
仕掛け人・栗林さんの紹介	
第1章 地域がつながるプロジェクト 2020 年の活動の記録	2
1. 「地域がつながるプロジェクト」の取り組み	2
プロジェクトの概要	2
豊島区との協働	3
訪問員の募集	4
訪問員の思い	5
訪問員向け説明・研修会	8
訪問活動の様子	8
子どもの顔と名前を覚える	10
苦労話や不安を話す機会に	10
参加家族の声	13
訪問活動を継続したい	15
チームワークが実現させたプロジェクト	15
2. 訪問員座談会	16
第2章 地域がつながるプロジェクト誕生の素地	20
1. 子どもとおせっかいさんの関係づくり	20
2. コロナ禍でできた地域ネットワーク	21
第3章 キーパーソンをつなぐ円卓会議	22
円卓会議の着想	22
キーパーソンをつなぐ	23
円卓会議の実現	24
参加者の気づき	26
参加者の組織や現場へのインパクト	27
円卓会議の利点	28
第4章 地域づくりのカギ	29
資料編	33
1. 豊島区支援対象児童等見守り強化事業実施要綱	
2. 「地域がつながるプロジェクト」参加案内チラシ	
3. 「地域がつながるプロジェクト」申込書（チラシ裏面）	
4. 「地域がつながるプロジェクト」訪問員募集案内	

はじめに～報告書の趣旨～

2020 年の春から新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、外出や飲食を伴う会合の自粛が求められました。そうした社会状況下で、これまでも生活が困窮したり、孤立しがちだった家庭の子どもたちが普段よりも増して困難な状況になる懸念が広がっていました。そこで、子どもたちの見守りのため、豊島区と豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク（以下 WAKUWAKU）が委託形式で連携してはじめたのが「地域がつながるプロジェクト」です。地域のおせっかいな大人たちがプレゼントをもって家庭訪問をするこの取り組みは、WAKUWAKU がこれまで取り組んできた、子どもを地域の真ん中におく地域づくりをさらに前進させる取り組みでした。

この報告書は「地域がつながるプロジェクト」の取り組みの内容とプロジェクト形成の素地となった取り組みを記録することを主たる目的としています。貧困研究とコミュニティ・オーガナイズングを専門とする筆者が執筆を依頼され、WAKUWAKU の栗林さんと天野さんへの聞き取り、活動同行、3 種類のアンケート調査、訪問員座談会と関係資料をもとに記録し、地域づくりの観点からの考察をつけました。豊島区のみならず、他の地域で子どもを真ん中におく地域づくりに取り組む方々の参考になれば幸いです。なお、この報告書は公益財団法人キリン福祉財団の助成金を得て作成しました。

東京都立大学非常勤講師 小田川華子
博士（社会福祉学）

◆◆◆ プロジェクトの仕掛け人

WAKUWAKU 理事長 栗林知絵子さんの紹介



自然の中で子育てをしたくて息子とプレーパークに通っていた栗林さんは息子が大きくなってからも地元のプレーパークで活動していました。そこで出会った中学 3 年生の A 君にあるとき「高校進学したいなら勉強を教えてあげるよ」と声をかけ、その時から栗林さんの自宅で無料塾を始め、2012 年に NPO 法人を設立しました。子ども食堂などの取り組みをする中でいつも、地域の子どもを地域で見守り育てよう、地域が変われば子どもの未来が変わるはずと周囲の人たちに思いを伝えてきました。栗林さんの愛情深いまっすぐな熱い思いに共感する仲間が増え、思い立ったらすぐに行動する機動力で、様々な取り組みが生まれてきました。「地域がつながるプロジェクト」もその一つです。 ◆◆◆

第1章 2020年度の活動の記録

1. 「地域がつながるプロジェクト」の取り組み

プロジェクトの概要

「地域がつながるプロジェクト」は、地域のなかで孤立しがちな子育て家庭と地域のボランティアが訪問活動を通してつながる取り組みです。ひとり親家庭など困難を抱える家庭のうち参加申し込みのあった家庭に対し、地域の有償ボランティア訪問員がお菓子などのプレゼントをもって訪問し、子どもや家庭の状況を把握するなど、地域で子ども見守る事業です。2020年11月から2021年2月にかけて毎月1回、訪問員が担当する家庭を訪問するなどして直接プレゼントを手渡し、つながりをつくってきました。参加希望をしたのは、ひとり親家庭や外国ルーツの家庭など豊島区から紹介があった家庭とWAKUWAKUがこれまでに支援をしてきた子どもたちの家庭のうち約300家族でした。地域で募った約70名のボランティアがこれらの家庭への訪問活動を行いました。



ネーミングに込めた思い

この取り組みを「地域がつながるプロジェクト」と名付けたのはWAKUWAKU 事務局長の天野敬子さんです。地域「を」つなげるではなく、地域「が」つながる、としたところに天野さんのこだわりがあります。

子ども支援の現場では「支援する—される」という関係が生まれがちで、支援の必要な人を地域の人につなげるという話がよく出ます。しかし、天野さんは、見守られる側の人たちも、地域で活動したい人たちも、どちらも主体をもった人間同志、なにより、どちらも地域の一員なのだという視点を大事にしたという思いを込めて、「地域がつながるプロジェクト」と名付けました。

豊島区との協働

2020 年春から新型コロナウイルスの感染が拡大し、首都圏では長期にわたり、外出や飲食を伴う活動の自粛が求められました。WAKUWAKU では、これまでの活動で出会ってきた子どもたちの家庭がコロナ禍によりさらに困難になる一方で、地域拠点で子どもと過ごし、見守る活動ができなくなっていることに危機感を感じていました。何とか子どもたちとつながりを保ち続けたいという思いを強くしていました。

同じ頃、政府の方では、厚生労働省が「支援対象児童等見守り強化事業」を打ち出し、自治体が民間団体と協力して行う見守り事業に補助金を出す事業の構想が出されました。この事業は、要保護児童対策地域協議会の支援対象児童等として登録されている子どもだけではなく、地域社会から孤立しがちな子育て家庭や妊娠や子育てに不安感をもつ家庭等の子どもや妊婦を対象に見守りを強化しようというものです。子供の貧困対策大綱が出されて以降、困難な状況にある地域の子どもたちの支援を行う民間団体が増え、要保護児童対策地域協議会の構成員に民間団体が位置付けられるようになっていたこともその背景にあると思われます。

WAKUWAKU はこれまでの子どもを中心に置く地域づくりと子どもとの関係を大切にしていた支援の積み重ねがあり、また、2019 年から区や社会福祉協議会関係者と開催してきた円卓会議などで情報や思いの共有ができていたことが素地になったのでしょう。子どもたちに食べ物をもって会いに行きたいという栗林さんたちと、要保護児童の見守りをしたい豊島区がタイアップして、「地域がつながるプロジェクト」が誕生しました。豊島区では「豊島区支援対象児童等見守り強化事業」として事業化し、訪問員やコーディネーターの人件費や事業運営にかかる経費を委託費として WAKUWAKU に支給することになりました。訪問員は、訪問した子どもの様子を記録して区に報告することで謝金を受け取る仕組みです。「地域がつながるプロジェクト」は「豊島区支援対象児童等見守り強化事業実施要綱」（資料編 1）にのっとり実施されています。

従来、要保護児童の情報は公的機関のごく一部の支援担当者間だけで共有されており、民間団体に共有されることはまずありませんでした。しかし、この事業を機に、訪問してもらいたい家庭のリストとして、要保護児童対策地域協議会が要保護児童の情報を WAKUWAKU に示したことで、これらの家庭を地域のネットワークの中で見守ることができるようになりました。2020 年 11 月末時点の参加家庭 217 世帯のうち 41 世帯が要保護児童対策協議会ケースの家庭でした¹。そのため、区の個人情報審議会をクリアしなければなりませんが、WAKUWAKU のこれまでの活動への信頼もあり、承認を得て前進することができました。

¹豊島区子育て支援課長山本りか「豊島区におけるコロナ禍の地域子育て支援」（2021 年 1 月 11 日シンポジウム資料）

訪問員の募集

このプロジェクトの事業化から実施に至るまでは相当なタイトスケジュールでことを運ばなければなりません。2020年11月から年度内に4回訪問活動をするには、10月中に区議会で事業の承認を得、訪問員の募集と研修をしておく必要がありました。したがって、事業化に向けて区との細かな打ち合わせをする一方で、訪問員を募集し、この事業の訪問員としてふさわしい地域の方々に個別に説明し、誘うという地道な活動を進めていきました。WAKUWAKUスタッフが地域の民生・児童委員、主任児童委員、青少年育成委員、保護司のほか、地域の子どものことを気にかけて下さっている方々に個別に声をかけました。その結果、議会で承認を得た翌日に訪問員への説明・研修会を実施し、11月から訪問活動を開始することができました。

そのような丁寧なアプローチの結果、約70人の訪問員が集まりました。しかし、どのようにして70人もの方に声をかけることができたのでしょうか？WAKUWAKUがこれまでに取り組んできたプレーパークや子ども食堂、無料塾などでの地域のサポーターとの出会いが礎になったことは間違いありません。それに加え、新型コロナウイルスの感染拡大で生活が困窮する子育て世帯にお米など食べ物を届けようという取り組みを2020年夏に他の団体と一緒に始めた際、たくさんの方に協力してもらう必要があり、ネットワークが広がりました。詳しくは後述しますが、誰もが緊急事態を実感している時期であったからこそ、「困っている家庭にどうしても食べ物を届けたいから手伝ってくれない？」という栗林さんのお願いに応じて下さる方々とつながることができたのでした。コロナ禍で活動ができなくなった団体が多いなか、栗林さんたちは禍を逆手にとり、かえって仲間を増やすことができたのでした。

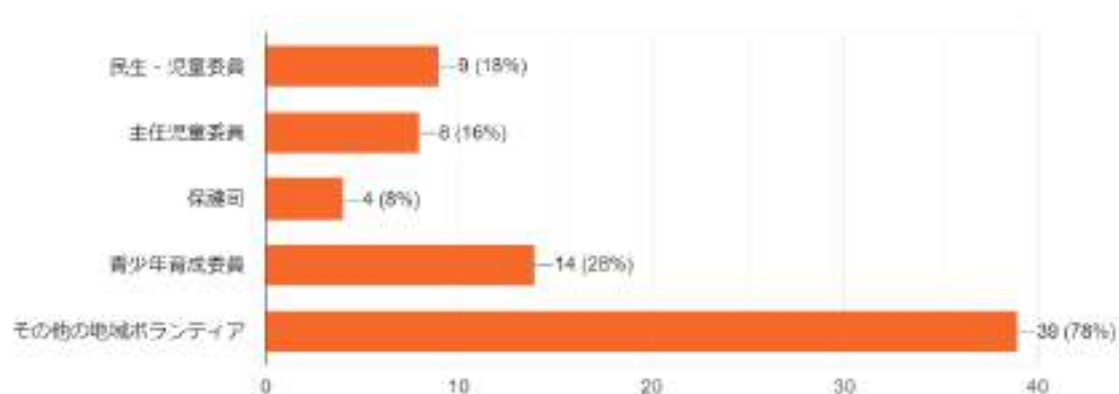


図1 訪問員が地域の子ども支援に携わる際の立場(複数回答)(n=50)
出所)訪問員アンケート

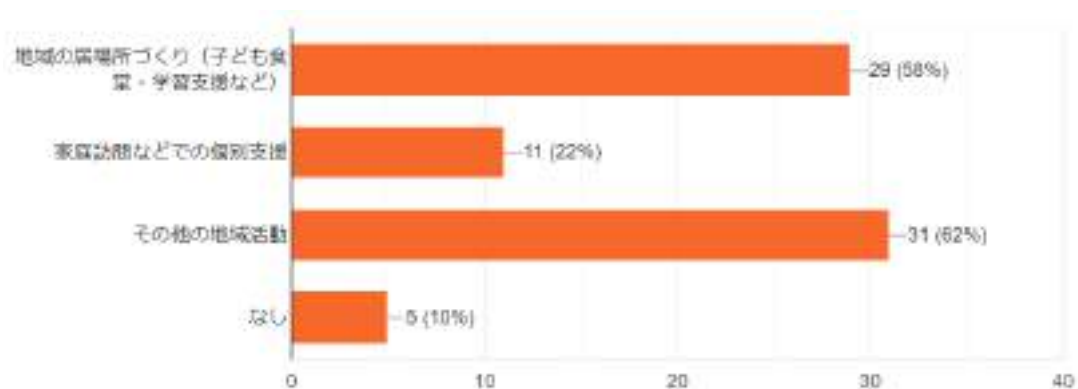


図2 プロジェクト以前に訪問員が参加した地域の子ども支援(複数回答)(n=50)
出所)訪問員アンケート

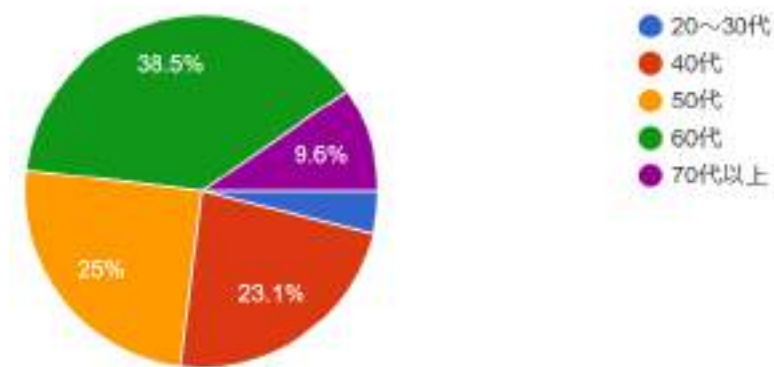


図3 訪問員の年齢(n=52)
出所)訪問員アンケート

訪問員の思い

応募した時の思いを訪問員アンケート²で聞いたところ、近所の子どもにプレゼントを届ける活動なら私にもできるし役に立てそう、と地域での子ども支援活動に参加するきっかけになった方、母子世帯のお母さんたちがひとりで子育てをする大変さを思いやり、孤立しないようにという思いで参加を決めた方もいました。これまでも地域拠点等での子ども支援に関わってきた方のなかには、戸別訪問というアウトリーチ活動をすることで、寄り添い型の支援ができるようになるのではという期待をもって始めた方もいました。

² 2021年2月15～22日に実施したインターネットを用いた訪問員アンケート調査。

訪問員に応募した時の思い

困ったときに声をかけられるご近所さんになりたい

お母さん達の負担を少しでも軽くさせてあげたい、という思いと「プレゼント」をもらう喜びをより多くの子供達に感じてもらいたいという思いから。

私自身が母子家庭で、それ故の苦しさを感じて育ったので、ひとり親家庭の子どもさんやお母さんのお役に立てるなら嬉しいと思ったからです。

生活しづらい家庭を地域で支える必要があると感じたから。とくにシングルマザーや外国人への支援が不足している。女性の非正規雇用が多いのも大きな問題点。支えてくれる人たちがいるということが、安心につながる。

子どもの悲しいニュースを見るたびに、自分でも何かできないかと考えていました。ネットやマスコミで母親を責める声を聞いたときに、責めるのではなく支援が必要なのに、どうしたらいいんだろう、といつも心苦しく感じていたので。

コロナ禍にあって子どもを取り巻く状況が厳しくなっている報道など目にする事が増え、地域の子どもとつながる必要性を感じたため。

訪問家庭にとってちょっと困ったときに声をかけられるご近所の知り合いになれたらと思った。

地域の子育て世代の支え合いに

我が家の長男にも障害があるので、地域の子育て世代でつながりたい、という気持ちもありました。

身近な地域での子育て支え合いの関係づくりのきっかけにしたかった。

近所で身近なつながりが出来るのはとても助かると実感しているから。

＊訪問員アンケートより抜粋

訪問員に応募した時の思い

これまでの活動ではできなかったつながり方を

月1回、または年数回のイベント開催では、なかなかつながりが持てなかったのですが、月1回の訪問事業だと、いざという時に頼ってもらえるつながりが作れるのではないかと思います。

ひろばの活動だけでは、繋がりがきれない、方達とお近づきになりたいと考えたから。

相談しやすい環境を作りたかったから。

各ご家庭の様子および子供の安否確認をしたくてもなかなか門戸を簡単には開けてもらえません。今回はギフトがあることで快くお家訪問させていただける。

無理なくできそう

地域内に支援を希望している人や家庭があるのが分からなかったが、月に1回、プレゼントを渡しに行くなら無理なく出来るかなと思い参加させていただきました。

地域の子どものために私でお役に立てれば思いました。

平時からゆるくつながることがとても大事だと考えていたため。

子育てしていると煮詰まることもある。そんなときに、誰かがくることで、なにか風穴になれば、と思う。

20人の家庭をサポートするのに、1人が担当したら大変だけど、20人が担当したらたいしたことがない。遠くにいくのは手間だけど、近所なら手間じゃないと思う。

私の家の近くに、ただ、近所である、というだけでも、何か、誰かのサポートになることがあるなら、と思いました。

* 訪問員アンケートより抜粋

訪問員向け説明・研修会

2020 年 10 月下旬に 2 回、訪問員への説明・研修会を実施し、訪問員はどちらか都合のよい方に必ず参加する形となりました。

第 1 回の説明会では、区の要保護児童対策地域協議会の支援対象児童の見守り、すなわち虐待の未然防止のための見守りを前面に出した説明を行いました。そのため、参加した訪問員には気軽に取り組める活動ではないという印象になってしまい、3 名の方が訪問員を辞退されました。

その反省から、2 回目の説明会では、WAKUWAKU が「地域がつながるプロジェクト」にかける思いを訪問員に伝えることに重点を置きました。訪問員が近所のおせっかいさんとなって子どもと保護者を訪ね、顔見知りになることがこの取り組みの重要ポイントであることを確認しました。

訪問活動の様子

Step 1

訪問日時の約束

訪問員と参加家庭で電話や E メールを用いて訪問日時の約束をしました。自宅に来てもらうのはちょっと、と思う方とは、近くの地域拠点で会う約束をしました。訪問員 1 人当たりの担当数は 2～4 家庭が平均的ですが、1 家庭のみ担当の人もいれば、12 家庭を担当する人もいました。このような偏りがあるのはなぜでしょうか？ご近所同士を意図してコーディネートしたため、参加家庭数が少ない地域ではひとり当たりの担当数が少なくなりました。また、主任児童委員は普段担当している家庭を本プロジェクトでも担当したため、担当数が多くなりました。

「地域がつながるプロジェクト」は参加家庭と訪問員がご近所さんとしてつながることを目指す取り組みですので、コーディネーターではなく、訪問員自身が担当の家庭に連絡を取り、日程調整をしました。ただ、なかには「メールを送ったのに返信が来ない」と訪問員が戸惑ってしまうことがあり、そのような相談があった時にはコーディネーターの栗林さんがコミュニケーションをサポートしました。

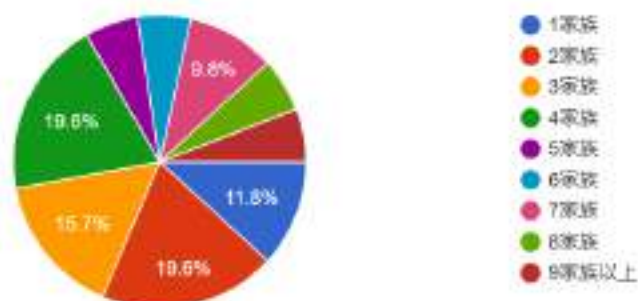


図4 訪問員が担当している家庭数(n=51)
出所)訪問員アンケート

Step 2

プレゼントをもって訪問

事前に訪問の約束をしておいたとはいえ、初回は参加家庭にも訪問員にも少なからず緊張感があつたようです。珍しい訪問者に警戒感をあらわにする方がいたのも当然です。ドアチェーンをかけたまま少しドアを開けてもらってプレゼントを手渡し、隙間から赤ちゃんを見せてもらったというエピソードもありました。また、担当する家庭についての詳しい情報は、訪問員に事前に伝えられていなかったため、緊張したという声もありました。しかし、回を重ねるごとに打ち解けられたケースが多かつたようです。プレゼントを子どもにもっていくだけでとても喜んでもらうことができ、出会いのきっかけになったことが、訪問員アンケートと参加家族アンケート³からよくわかります。

プレゼントをもって親子に会いに行き、子どもの様子を確認することが区からの委託事業として訪問員がしなければならない最低限のことでしたが、ご近所さんとして体調を気遣ったり、仕事や子育ての話をしたり、子どもには学校のことや好きなことを聞いたり、会話を通してつながりを感じられる関係ができたようです。なかには、訪問員が料理のレシピや子育て情報を教えてあげたり、子育て経験談を話してお母さんに心配しなくても大丈夫と声をかけてあげたりすることもあったようです。子どもが元気に挨拶できたことを褒めてあげたり、子どもの発表会のビデオを見せてもらったりと、子どもの成長と一緒に喜んだエピソードもありました。また、子どもが喜んで飛びついてきてくれた、帰り際にベランダから手を振ってくれた、子どもからお礼の手紙をもらったという嬉しいエピソードもありました。プレゼントをもって訪ねていく活動は、地域で孤立しがちな子育て家庭が地域の人とつながるととても良い機会になったようです。

プレゼント+α

11月にはレトルトパックのお惣菜、12月はクリスマスプレゼント(お菓子詰め合わせ)、1月はお餅、2月は区内のお菓子屋さんのチョコレート詰め合わせをもって訪問しました。

あわせて、支援情報も届けました。1月は就学前の子どもがいる家庭には訪問型の子育て支援事業であるホームスタートの案内、2月は小学校入学を控えた年長幼児と高校入学を控えた中学3年生のためのWAKUWAKU入学応援給付金の案内、外国人家庭の子どものための他団体による給付金を案内しました。

³ 2021年2月15～22日に実施したインターネットを用いた参加家族アンケート調査。

中国人ファミリーBさんのお宅訪問

Bさん宅を訪ねたのは2月、旧正月の夕方6時半。お母さんが玄関先で明るく出迎えてくれました。訪問員が「バレンタインのチョコレートだよ」と娘のCちゃんに手渡すと、にっこり笑ってとても嬉しそうでした。

この日、訪問員が気にかけていたのはお母さんとお父さんのお仕事のこと。二人とも飲食店で働いていましたがコロナ禍で仕事がなくなり、生活が大変だと前の月に聞いていたのです。幸い、お父さんのお仕事が再開したと聞き、「良かったじゃあん！」とほっとしました。

家の中では旧正月の祝いの夕食の準備が整っているようでした。家の奥にいたお兄ちゃんに呼びかけると、少し恥ずかしそうに元気な顔を見せてくれました。

子どもの顔と名前を覚える

訪問員アンケートでは、45%の訪問員が子どもの顔と名前を全て覚えたと答えました。子どもが恥ずかしがりとても短い時間しか顔を合わせられない場合や、期間途中からの参加のため訪問回数が少なかったり、担当数が7家庭以上になると子どもたちの顔と名前を覚えるのが少々難しいようです。

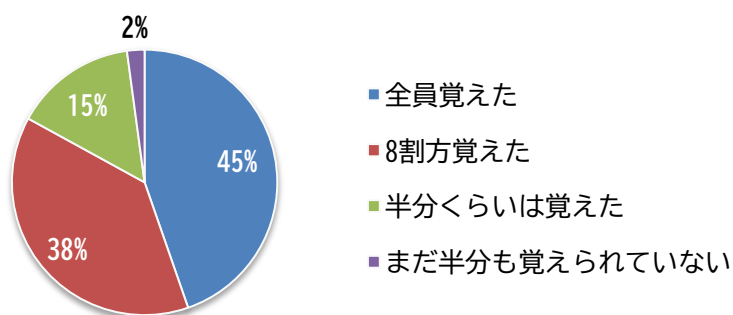
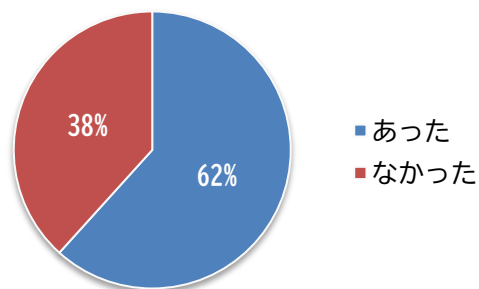


図5 訪問している子どもの顔と名前をどのくらい覚えたか(n=51)
出所)訪問員アンケート

苦労話や不安を話す機会に

訪問員の中には、「困っていることはない?」とか「困ったときは連絡してね」と声をかけたという人、日常の様子を聞くなかで、心配事について聞くことがあったという人もいました。62%の訪問員が「保護者から子育てや日常生活の苦労や悩みを聞くことがあった」と答えています。



**図6 訪問活動の中で、保護者から子育てや日常生活の苦労や
悩みを聞くことはありましたか？(n=51)**
出所)訪問員アンケート

<子どもの発達について>

「うちの子、最近こんなふうなんだけど・・・」という子どもの発達について気になることは子育て中の親同志の会話でよくある話題です。訪問活動のなかでもやはり、「最近〇〇なんです」とか、「気難しくて」とか、「おかしくないですか」といった声が保護者から聞かれましたが、子育て経験のある訪問員からみれば年齢相応のように思えるといった話ができるようです。なかには、障害のある子ども向けの公的な支援サービスを専門機関から勧められたが利用するかどうか迷っている、あるいは利用する際の悩みや不安の相談にのる訪問員もいました。

<親の仕事と子育て>

特にひとり親家庭では、子どもの学校や学童保育がない時間帯にも母親が働きに出ざるをえず、子どもに留守番をさせなければならないのが実情です。子どもだけで留守番をしているときに訪ねていった訪問員もいました。母親からは「子どもに留守番をさせて仕事に出なきゃならないのは心配だけどそうせざるを得ない。」「いま同居している母が故郷に帰ってしまうので、夜勤の時、子どもをどうしようかと思う。」といった悩みが聞かれました。あるひとり親家庭は平日は終日仕事のため、プレゼントをもってきてもらうのは仕事が休みの日曜日しかなく、とにかく忙しい印象で、母親の体や心のリフレッシュはどうされているのか気になるという訪問員もいました。

そのほか、「子どもの病気で仕事を長く休まねばならなかったのも、金銭的にも、職場に対しても辛かったことなどを話せる人がいてよかった。」と言ってもらったエピソードもありました。

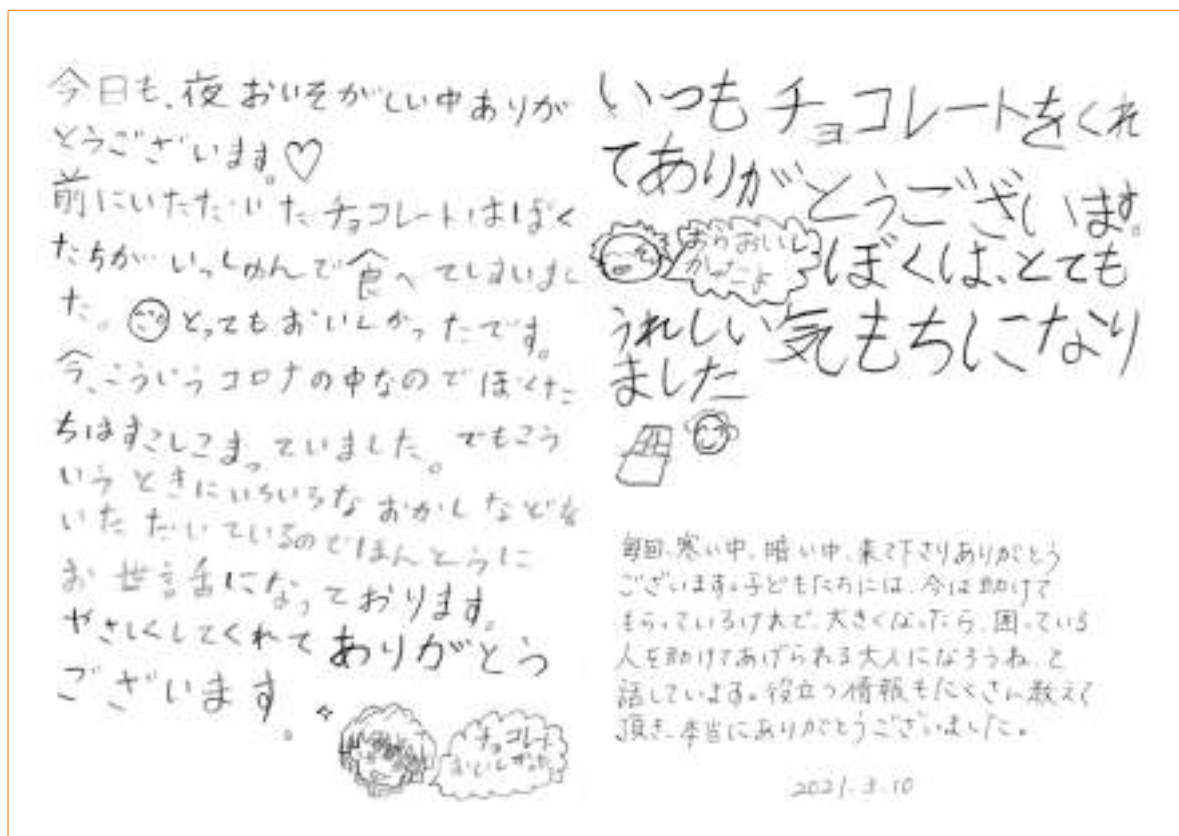
<親の病気の時の子どもの世話>

新型コロナウイルスの感染に親が感染してしまった場合、隔離しなければならないため、その間、子どもはどうすれば良いのか、という心配はどの家庭でもあったはずですが、とりわけひとり親家庭では不安が大きかったようです。2人の幼児を育てるシングルマザーの「もし、自分がコロナにかかったらこの子たちはどうなるのかと思ったら不安」という言葉を聞いて、「何かあったら、すぐ電話してね」と伝えられたことが嬉しかったし、直ぐに行ける距離であることが嬉しいと思いました、との訪問員の感想もありました。

<子どもの成長と生活環境>

子どもが小学校に入学する、中学や高校に進学するようなときには、各種手続きが必要なこともさることながら、生活時間が変わるためいろいろな不安があり、訪問員に声をかけてもらえることが安心につながったようです。

一方で、子どもの年齢があがるとプライベートな時間や空間が必要になりますが、自宅が狭いため将来的に不安だという家庭もあり、訪問員としても気がかりだという声もありました。



Dさん家族(お母さんと2人の息子さん)から訪問員Eさんへの手紙

参加家族の声

プレゼントを頂けることも大変ありがたいですが、毎月担当者の方とお会いできることを子どもも楽しみにしていたようで、子どもも喜んでいてとてもよかったです。

(母子、1～3 歳)

知人の紹介で知りました。ひとり親として不安な時もありますが、こういったつながりが救いになるなと思いました。 (母子、1～3 歳)

子どもたちは届けてきてくれる方の顔と名前を覚えて 外で会ったときも自分たちから声をかけるようになってます。毎回素敵なプレゼントもとても喜んでました。

(母子、1～3 歳, 4 歳～未就学)

家に子供と閉じこもりがちな時期、定期的に会いに来てくれる支援者さんとお喋りにいつも気持ち救われました。2 月まで、3 月までと言わず、子供がある程度大きくなるまで続けられるといいのにな、と思います。 (母子、4 歳～未就学)

大変助かっています！金銭的にも心にも(一時ではありますが)少し余裕ができ、もう少し頑張れるかなという気持ちになります。

(母子、4 歳～未就学)

コロナ禍でコミュニティが狭くなっていましたが、短い時間でも対面で話す機会がありリフレッシュになりました。プレゼントも毎回喜んでいました。(母子、小学 1～3 年生)

自宅まで、ご足労いただき恐縮です。毎回、子供が大変喜んでおりました。〇〇さんと一緒にご飯を食べるなどといい、訪問の度に喜んでいました。子供の喜んでいるのは、親も嬉しいです。

(母子、小学 1～3 年生)

ひとり親世帯で、実家も他県でコロナ禍の為、しばらく祖母とも会えない中、定期的に来て下さり、何か有れば相談出来るという安心感を頂きました。

(母子、小学 1～3 年生、4～6 年生)

毎月子供の様子を見に来て下さり、地域の人たちとの交流が少ない今、とても安心できて嬉しいです。

(母子、小学 1～3 年生、4～6 年生)

いつもありがとうございます。引越してきたばかりでママ友もおらず、毎月声をかけていただけるだけでホッとしています。

(母子、小学 4～6 年生)

参加家族の声

支援の方に、お会いした時、料理など教えてもらったり、子どもに手作りの玩具頂いたりで親子で月1回お会いできるのを楽しみにしています。

(母子、小学4～6年生)

感謝の気持ちでいっぱいです。このようなコロナの時、家に会いに来て、悩みを聞いて、食料を送ってくれます。本当にありがとうございます。

(母子、外国ルーツ、0歳、1～3歳)

子どもも毎月楽しみにしていましたし、家計も非常に助かりました。ありがとうございます。

(母子、外国ルーツ、小学1～3年生)

とにかくお菓子に大喜びです。いつも学校のいらなくなったお便りの裏紙でお絵かきをしているので白い紙にお絵かきさせてあげたいと思っているので、食べ物以外なら折り紙やお絵かきノート自由帳などあったらいいと思います。(母子、小学1～3年生)

とてもありがたかったです。兄弟が揃って時間の調整が少し大変でした。

(母子・三世代、1～3歳、中学生以上)

毎月、担当の方と会うのを私も子どもも楽しみにしています。担当の方が描かれた本を見せて頂き刺激を受けたみたいで子供も本作りに励んでいます。毎回、楽しく話をさせて頂きありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

(母子・三世代、小学1～3年生)

いつもあたたかい対応をしていただき、先日はお餅を自宅付近まで届けていただき、とても助かりました。更に、なにより「みんなで子どもを育てていこうね!」とお言葉をいただいた事がとても嬉しかったです!!

(両親世帯、0歳)

近所の方と気軽に話せる機会が得られて嬉しかったです。なかなか公園等でも話しかけるのに悩むので、とてもありがたかったです。先輩ママさんからの地域の情報も、とても助かりました。(両親世帯、1～3歳)

実際に、一軒一軒回られるのはかなりの労力だと思うが、子どもの顔を知っていただけて安心感がある。

(両親世帯、中学生以上)

嬉しい

(両親世帯、外国ルーツ、0歳、1～3歳、4歳～未就学)

訪問活動を継続したい

このように、訪問活動を通して子どもが近所の大人と顔なじみになったり、子どもも保護者も訪問員も互いに会うのを楽しみにし合える関係になったりと、それぞれにとって楽しいプロジェクトになりました。

一方で、孤立しがちな親たちの苦労話や心配ごとから分かるように、心配だから引き続き見守っていけるようにしたいという気持ちも WAKUWAKU スタッフの中でも大きくなりました。そこで、2021 年 3 月も WAKUWAKU の独自事業として、申し込みのあった家族に継続して訪問活動をすることになりました。

チームワークが実現させたプロジェクト

「地域がつながるプロジェクト」はいつも子どもたちと関わっている栗林さんの「こんなことをしたい」、「あったらいいな」から着想を得た取り組みです。栗林さんのアイデアを豊島区との協働事業として実行するには、期限までにしなければならないことがたくさんあり、大変でしたが、段取りを立てて物事を進めるのが得意な天野さんが実務を担いました。

プロジェクト開始後は、毎月 10 日までに訪問員からの月報を集計し、報告書にまとめて区に提出しなければなりません。短期間に 800 万円という大きな額の委託費を受けるのは初めてで、区との信頼関係を築くためにも、このプロジェクトの運営を区の事業実施要項通りに行うことはとても大事なことでした。そのため、コーディネーターの栗林さん、事務局の天野さんもとても頑張りました。日々、他のさまざまな事業をこなしながら、このプロジェクトの運営をきっちりと遂行できたのは 2 人の他に、優秀な有給の事務職員がいたおかげでもあります。

それぞれが得意なことを活かし、不得手があることも受け入れてもらえる安心感をもてることが、互いに信頼し、支え合うチームワークの秘訣です。

2. 訪問員座談会

3月の訪問活動を終え、7人の訪問員に集ってもらい、天野さんのファシリテートで座談会を行いました。訪問活動をしてみての実感や気づきを具体的な体験談を交えて掘り下げ、このプロジェクトの意義をさらに明確にするとともに、訪問員それぞれの思いや願いを共有し、今後の活動継続の力にしていけることが座談会の目的でした⁴。ここでは、個人が特定されないよう配慮しながら、訪問員の対話の一部を紹介します。



はじめて訪問したときの気持ちや困ったことを
教えてください。

初めての訪問の時はお菓子ではなくカレーのレトルトだったので、初対面で心の扉を開くには、少しやりづらかったです。最初
は大きなプレゼントが良かったな。はじめは警戒してドアの隙間
から赤ちゃんを見せてもらったけど、今では上がり込んで一緒に
お茶を飲む仲になってます！



宅急便の配達員向けか、「荷物は置いておいてください」と玄関先に書いてあ
って、なかなか出てきてもらえなかったんです。いろんな人が勧誘とかセー
ルスに来るので警戒感があるみたい。「お肉とカレー好き？」と話しているう
ちにお顔がほぐれていきましたね。



ミャンマーの方は言葉の壁があるように感じました。「大丈夫で
す」「わかりました」と返事が来ても、実はそうではなくて、伝
わっていないこともありました。

ミャンマーの方のお宅では、訪問員は必ず子どもと会うことにな
っていることが理解されていなかったけど、直接話したら分
かってもらえました。いつもお友達がいて、支え合いがあって、
落ち着いている感じがしました。

⁴2021年3月14日（日）9:30～11:30に区内の公共施設にて行いました。

ある家庭では、「虐待してる」と疑っているの？」「どこから派遣されてるの？」「お金はどこから？」と疑われ、傷つきましたね。私が主任児童委員だということだということが偶然伝わってからは、理解してもらえるようになっていい関係になったのが救いです。



私も主任児童委員をしています、いつもは家庭訪問をしたくてもなかなか難しいです。今回は、行政とも学校ともうまくいっていない家庭に、ギフトがあるということで、門をあけてもらえる。ただの近所のおばさんとしてお家の中に入れる、ありがたい 5 か月でした。フードロス対策で売れ残ったおにぎりを出してくれる近所のお店からおにぎりをもらって持っていったら「おにぎりが来た～」と喜んでました。そのお母さんは、私のメールだけはみて返事をくれるんです。他にも、子ども食堂で出会って気にかけていた家庭にもつながることができて良かったです。

活動を通してどのような気づきがありましたか？

2 回目に行ったときに反応が全然違ったのがうれしかったですね。まず「おいしかったです」って言うてくれて。会社ではできない子ども関係のトークができたのがうれしかったみたい。ちょっとした会話が必要なんだ！ってということが分かりました。そして、お子さんが、「僕も今度プレゼント用意しておくね」って言うてくれて、心があったかくなって、なんて宝物をもらっちゃたんだろう！って思いました。



私は同世代の友だちが増えた感じがしてます。対等な関係を築くようにしていて、きれいなお母さんには美容法を聞く。エンタメ、韓流の話は盛り上がるね。あとは前の旦那の悪口をきく。地域でそんな話ができる友人関係が必要なんだと思うんです。あと、食べ物でつながるのも良いけど、エンタメも大事。つらい時にはとくにね。

2 回目、抱きついてきてくれた女の子がいったんですね。休みの日にも会えるようにプレーパークにつなげて、訪問員以外の大人ともつながって欲しいし、近くの他の訪問員さんにもつなげて見守っていけるようにしたいと思ってます。



ミャンマー人の赤ちゃんのいる家庭のお母さんから、乳腺炎で痛くて困ってるって電話がきたので行ってみたら、痛いからって冷やしてたんです。「こういう時は温めないといけないのよ」と教えてあげられて良かったです。

学校からのお便りが親に届いてなくて、就学援助の申し込みのことを知らなかったり、豚を食べられないイスラム教の子どもには移動教室の時に食べ物を宅急便で送らないといけないのを知らなかったということを聞きました。

回数を重ねるごとにいろいろな情報やサポートが必要なのがだんだんわかってきて、月 1 回の訪問活動をとおしてそのサポートができるようになってきたのが良かったです。

学校の書類とか、書き方が分からないので、サポートしてあげられる人が近所にいるといいですね。

このあいだ小学校の先生から連絡が来て、ミャンマーの子どもが 4 月に入学するので、それまでに地域で日本語を教えてあげて欲しいと言われたんですね。それでまず、「地域がつながるプロジェクト」に申し込んでもらってと伝えました。会いに行って学用品の準備についてのプリントを見せてもらって、〇〇までに〇〇を用意するんだよということも教えてあげることができました。こういうことができるのがいいね。



仕事でスケジュール調整が大変でも、近いからできるのよね。天気が悪いからと遠慮される方もいたけど、近くだから雪でも雨でも大丈夫。近所に住んでる人だからということで、ドアを少し開けてもらえたと思う。

それから、行かなくても、LINE とかで「元気？」とやりとりする関係ができると良いですね。

今後、どんなふうにしていくのが良いと思いますか？

私は今後も続けたいです。長期休みは 2 回行くとか。訪問家庭数は今のままがちょうどいいですね。

私は今回のように 4 回とか期間限定でやるのが良いと思ってます。このプロジェクトではじめの出会いがあって、そのなかで関係ができて、プロジェクトが終わっても何か残るものがあると思うんです。ずっとになると、お互いの関係が雑になってしまう時がくるだろうと思うんですね。

ムリなく持続できる関係性をつくるのがいいですね。物に頼ってでも。

食べ物は、炭水化物ではないものもあるといいなと思う。

でも子どもがもらって嬉しいのはやっぱりお菓子かな。

1月のお餅がよかったね。

かさばるものは大変という訪問員もいたね。



最後にひとことお願いします。

WAKUWAKU さんがバックにいて、困ったときは相談してねと言われてたので、活動しやすかったです。でも、入り込めないところがあったので、今後はもっと話をしていきたいです。

孤立しがちで心配していた家庭がたくさんあって、会いたかったご家庭に会えて本当にうれしかったです。

訪問活動ははじめての経験で、自分の目が開かれることがありました。自分のためにもなった貴重な時間だったと思います。



地域のことをより知ることができ、再発見がありました。

宝物がいっぱい増えて、また地域と深くつながった感じがあり、再会できたことのうれしさもありました。またこういう活動に参加させていただければと思いました。



他のみなさんの話をきいて、自分もいろんなところに顔を出して活動をしていきたいと思います。

みんなやってよかったと言ってくれているので、次の時には皆さんが地域で信頼している人を誘ってもらって、そうすれば、おせっかいさんが 140 人になって、もっと豊かな地域になるなと思いました！

子どもたちも、こんなおせっかいな訪問員さんたちも

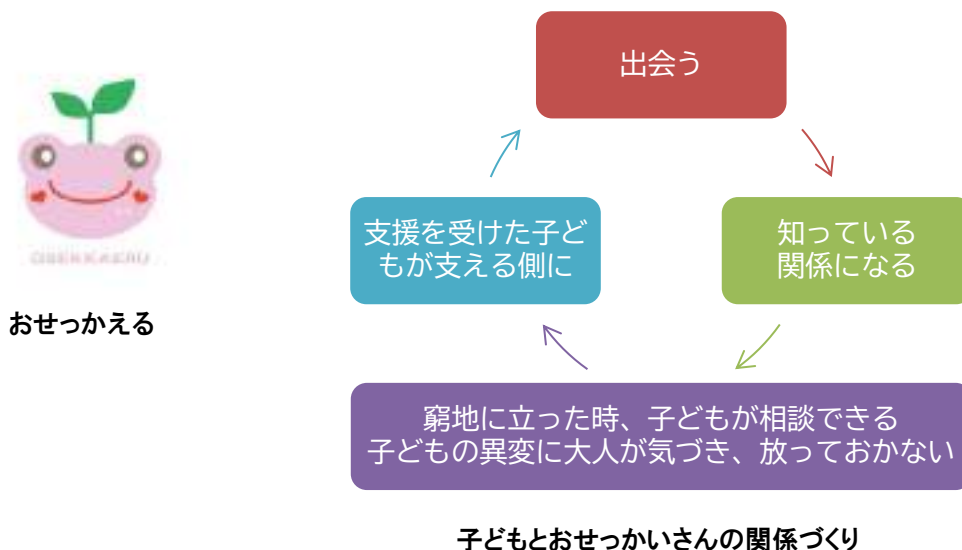
地域の宝ものです

第2章 プロジェクト誕生の素地

1. 子どもとおせっかいさんの関係づくり

約半数の訪問員はプロジェクトが始まる前から、プレーパークや無料学習支援、子ども食堂、夜の児童館などの地域拠点での活動に関わっていました。そこで大事なことは、プログラムそのものもさることながら、そこでの子どもと大人の関係づくりです。この関係づくりで得た手ごたえが、「地域がつながるプロジェクト」の素地となっているといっても過言ではないでしょう。

地域の子どもと大人が地域拠点で出会い、知り合いになります。子どもたちが「この人は自分のことを大事に思ってくれている、気にかけてくれている」と感じられる関係になると、窮地に立った時、子どもの方から相談できるようになります。また、子どものいつもの様子を知っている大人は、窮地に立っている子どもの異変に気付くことができます。そんな時にただ心配をするだけではなく、どうしたのか聞き、力になろうとするのがおせっかいさんです。子どものつぶやきをキャッチしておせっかいになるプロセスの繰り返しで一人一人の子どもの関りが深くなると栗林さんは言います。こんなおせっかいさんに囲まれて育った子どものなかには、成長したあと、今度は自分が地域の拠点に集まってくる子どもを支えるおせっかいさん（おせっかえる）になるという人も出てきます。WAKUWAKU はそのような循環をつくっていくビジョンを共有しながら子どもを真ん中においた地域づくりを目指してきました。



2. コロナ禍でできた地域ネットワーク

新型コロナウイルス感染拡大により、ひとり親世帯を中心に、子どもたちとその家族の生活が厳しさを増していることは想像に難くありませんでした。緊急に行った実態調査アンケートでそのことが裏付けられると、すぐさま経済的に厳しい家族を支援するために、区内の様々な団体や個人が協働しての食糧支援活動が始まりました。春から夏にかけて行った「としまフードサポート」と「としまランチサポート」、そして夏から秋にかけて行った「ライス！ナイス！プロジェクト」です。

「としまフードサポート」では、様々な団体や個人に米とレトルト食品を中心とする寄付を募り、3月～7月の間に6回、のべ1634世帯に食料を配布しました。外出自粛により移動が制限されるなか、受け取る人の移動を少なく、また一か所に集まりすぎない方法を検討した結果、区内の主要駅近くの10か所と夜間用1か所を配布場所として、取りに来てもらうことにしました。個別に配達した家族もありました。この方法で食料を配布するには、場所を提供してくれる人や団体、食料を配布場所に運搬したり、配達したりするドライバー、そして、配布場所を担当してくれる人を見つけ出さなければなりません。その結果、これまで無料学習支援や子ども食堂で活動してきたボランティアだけでなく、地域の様々な立場の団体（企業、宗教団体、社会福祉法人、NPO法人、任意団体、区民ひろば、区など）やボランティア（社会福祉協議会、民生児童委員、青少年育成委員会など）が配布活動に参加し、そのつながりがネットワークになっていきました。

また、飲食店から社会福祉協議会に「子どもたちに昼食を用意することが難しい家庭にお弁当を届けられないか」との相談があったことがきっかけで5月から「としまランチサポート」が始まりました。社会福祉協議会が間に入って、飲食店の他、生協や農協、NPO法人など様々な協力団体から弁当や野菜、牛乳、お菓子を提供してもらい、民生児童委員などのボランティアが配布活動を担いました。

8月になっても経済状況は好転せず、食糧支援を必要とする家庭がたくさんありました。そこで8月～9月、11月～12月の2回にわたり区内22か所の区民広場の軒先をかりて約1,100世帯に精米5キロを配布する「ライス！ナイス！プロジェクト」を区とWAKUWAKUが協働で行いました。

「としまフードサポート」の時よりも世帯数と配布場所が多かったため、袋詰めや配布などにより多くの人手が必要でしたが、これを実現させるために手伝ってくれる人の輪が広がりました。このようにして、「地域がつながるプロジェクト」で数百世帯を手分けして訪問するおせっかいさんたちとのつながりができてきたのです。



第3章 キーパーソンをつなぐ円卓会議

豊島区では2019年7月から2021年2月まで4回にわたり、地域のキーパーソンが膝を突き合わせて意見交換をする「豊島みんなの円卓会議」が開かれてきました。この円卓会議での意見交換の経験が、「地域がつながるプロジェクト」誕生の素地となったことはおそらく間違いないでしょう。この章では「豊島みんなの円卓会議」の形成過程とその成果について、栗林さんのお話と円卓会議参加者アンケートの結果などをもとに記録します。

円卓会議の着想

「豊島みんなの円卓会議」を発案したのはWAKUWAKUの栗林さんと子どもサポーターズとしま学習支援会クローバーの谷口弁護士です。2019年の梅雨も終わりに近づく頃、栗林さんは、子どもを真ん中においた地域づくりには、今、地域で子ども支援をしている人たちがもっとうまく連携して取り組んでいくことが大事だと考えていました。「誰一人とり残さない」ために様々な社会の構成員が協働して取り組むSDGsを豊島区でも実践したいとの思いもありました。また、いろいろな団体が子どもに関わる地域活動をし、その活動をサポートする子ども基金が豊島区にあったらと夢を描いていました。

2021年2月に地域再生大賞を受賞することになる佐賀未来創造基金の方と話したときに、テーマ型の地域団体だけでなく地縁型の地域団体、そして行政と一緒に取り組みを創っていかないとどこかでうまくいかなくなると聞いていたからです。シャプラニールの坂口さんが西東京市で円卓会議を企画し、いろんな立場の人が平場で集まって話すことを通して地域に必要な支援を創り出すということをされていたのもヒントになりました。また、長野県飯田市の市長から円卓会議の本をもらい、そのような場がわがまち豊島区にも絶対に

<豊島みんなの円卓会議とは>

豊島区では、全ての人を取り残さない包括的で安心できるコミュニティ作りを、行政も、民間も、それぞれのやり方で取り組んでいます。もっとも、地域での活動はまだ各個人や組織がそれぞれ独自に取り組んでいる側面があり、有機的なネットワークを形成しきれていません。また行政と民間それぞれがお互いの活動を十分に認知し、活用し合うような関係も十分に形成されているとは言えません。

同じ志をもって活動をする行政・地域の人たちが、お互いの課題意識を共有し、より良い協力・連携関係を作り上げるため対話を目指す場が豊島みんなの円卓会議です。

必要だと栗林さんは考えたのです。

2019年7月初旬、ある家族のための居住支援について谷口さんのオフィスで打合せをしていた時にこの話になりました。谷口さんが栗林さんに聞きました。

谷口：どういう場が必要だと思う？

栗林：円卓会議のような場が必要なんじゃない？普段は肩書をもって子ども支援にかかわっている人たちも、肩書を気にせず話をしたり聞いたりができる場。名刺交換はせずに、公開するような記録もとらない形で。

谷口：いいアイデアだね。じゃあ、それをやろう！誰に声をかけたい？

栗林：行政、社協、地縁型の地域活動をしている人、テーマ型のNPOとかかな。WAKUWAKUもクローバーもNPOだけど、地域にはPTAとか青少年育成委員みたいに、地域の子どもみんなを見守る人たちもいれば、主任児童委員みたいに、とくに大変な家庭の子どもをよく見てくれてる人たちもいるでしょ。最近は企業の人たちもいろんな取り組みをしてくれてるよね。こういう地域の大人たちがもっとお互いに知り合って、子どもたちを受け止めるネットワークになると良いし、私たちの民間の取り組みを社協や区の人たちにも知ってもらって、対等な形で連携していけるようになるといいんじゃないかな。

谷口：そうだね。いつぐらいにするのがいいかな？

栗林：7月末はどう？

谷口：いいんじゃない？

栗林：じゃあ、あたし、明日から声かけて回るよ！その時に何か資料があった方がいいよね。企画書みたいなやつ。

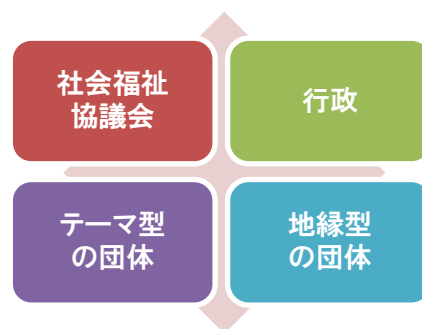
谷口：そうだね。じゃあ企画書はこっちで作るよ。

という具合に5話は始まりました。

キーパーソンをつなぐ

言葉通り、栗林さんは翌日から、青少年育成委員会連合会の会長、社会福祉協議会の課長、ワーカーズコープのキーパーソンを訪ね、問題意識を聞きつつ、企画の趣旨を話し、呼びかけ人になってもらいました。このように多様な領域の方に呼びかけ人になってもらうことで、いろいろな団体が参加しやすくなるはずという目論見があったのです。

そして、区役所の関係部署の部長、課長、係長の



円卓会議参加者の4つの領域

5 栗林さんの回想をもとに、分かりやすく脚色しています。

他、民生児童委員、主任児童委員、PTA 会長、町会役員など地縁組織の方、そして NPO やビジネスセクターの社会貢献団体のキーパーソンを訪ね、参加を呼びかけました。

毎回の円卓会議の開催案内には各回のテーマと趣旨とともに、下記の「当事者意識と円卓の地域主義」のコンセプトが記されました。それぞれが単独で素晴らしい活動をするだけでは十分ではない。競い合うのでもない。「私たち」が主体となって「私たち」の地域と一緒に創っていききたいのだというメッセージがここから伝わってきます。

円卓会議の実現

こうして、着想からわずか 2 週間余りで第 1 回「豊島みんなの円卓会議」が実現したのでした。豊島みんなの円卓会議は平日の夜に 2 時間程度行い、そのあと、お弁当を食べながら懇親会をしました。食を通じて人々がつながる場がここにもありました。

第 1、2 回で手ごたえを感じ、2020 年度は呼びかけ人が増えました。新型コロナウイルスの感染拡大のため、対面での開催自体が危ぶまれましたが、やはり「会って話すことが大事」という初心を貫徹するため、感染防止策を講じ、懇親会はなしにして開催しました。第 4 回はケース検討会形式にし、どのような仕組みがあればよいか、あらたな活動や提案の場となりました。

当事者意識と円卓の地域主義

「少子化、高齢化の右方下がり時代にあっても持続可能な地域社会は実現できるのではない。地域の人々が当事者意識に目覚め、それが地域社会を構成している産業界、自治会、NPO、大学、そして行政などに波及し、地域全体が自ずと多様な主体として協働することになれば、地域社会を変えていけることができるのではない。」

自分たちの住むまちを善くするために、ラウンドテーブル（円卓）を囲んで議論する。ラウンドテーブルには意味がある。ここが上座という意識はなく、誰が偉いということでもない。貴賤の差別なくみんなが対等に話し合いをするということだ。時には専門家にアドバイスを求め、みんなで智恵を出し合い、折り合いをつけながらまちの価値を高めていく。このような行為を私は共創と呼んでいる。共創の場、共創の時間は、共創の志から生じるものであり、その志の源泉は自分たちのことは自分たちでという当事者意識にある。

地域の課題を共有し、その解決策を探るのだ。その過程において想像力を働かせ、創造性を発揮して解決策を見出そうとすることが当事者意識を持つことにつながる」

牧野光朗『円卓の地域主義』より抜粋

毎回の円卓会議開催案内に記されている円卓会議のコンセプト

豊島みんなの円卓会議各回のテーマと開催趣旨(第1回～第4回)

	日時	テーマと開催趣旨
第1回	2019年7月24日 18:00～20:00	<p>【すべての子どもが孤立しない地域社会を考える】</p> <p>豊島区では、近年子どもに対する民間の支援活動が盛んに行われています。行政においても従前からの子ども・若者支援、子育て支援の仕組みに加えて、こうした民間の活動と連携し、これを積極的にサポートしようとする動きも出てきています。</p> <p>行政や民間が自らの行っている取り組み等について互いに共有するとともに、日頃感じているニーズや子どもが孤立しない地域社会作りのためにできること、やっていきたいことなどについて対話します。</p>
第2回	2019年12月20日 18:00～20:00	第1回と同じ
第3回	2020年8月5日 18:00～19:30	<p>【コロナ下で見えた地域連携の現在とこれから】</p> <p>前回の豊島みんなの円卓会議では、地域の人材養成に取り組んでいくことが確認されました。そうした中、新型コロナウイルスの感染拡大により、地域の様子は一変し、子ども食堂や学習支援などの多くの子どもたちのための取り組みも中止を余儀なくされてしまいました。</p> <p>他方で、区民ひろば、民生委員や主任児童委員、NPO、民間企業で連携し、連日の約1000食に及ぶ緊急お弁当配布が行われる等の活動が実施される等、この間形成されてきた連携が良い形で行動へつながった例もありました。</p> <p>災害は、地域社会の強みも弱みも明らかにすると言われています。今回のコロナ下で、私たちの地域の現状を共有するとともに、今回のコロナで見えてきた課題を整理し、前回で確認された地域の人材養成に向けて意見交換をしたいと思います。</p>
第4回	2021年2月1日 14:30～16:30	<p>【連携協働の食支援で誰一人取り残さないまちづくりを考える】</p> <p>豊島区では、子ども食堂に始まり、フードパントリー事業、コロナ禍におけるお弁当配布やライスナイスプロジェクト等々、すべての人が生きていく中で欠かすことのできない食を通じて、人々がつながる活動が着々と広がっています。今回の円卓会議では、この間の実践を共有し、また成果と課題点を議論し、食を通じて、コロナによる苦境の中でも、誰も取り残されることのないコミュニティを作っていく活動の今後をみんなで描いてみたいと考えています。</p>

参加者の気づき

円卓会議は参加者にとって、子どもの実態やアプローチ方法についての新たな学び、互いの熱い思いに触発される機会、連携の糸口となりました。円卓会議参加者アンケート⁶から、「円卓会議に参加してあなた自身が気づいたこと、学んだことはありましたか？それはどのようなことでしたか？」との問いへの回答をいくつか紹介します。

参加されている方々のモチベーションの高さ。(社協)

子どもの支援に様々な NPO 法人があり、その運営に若い人が沢山積極的、真剣に関わってくれていることに嬉しく心強くなりました。(テーマ型団体)

豊島区に子ども支援に関わっている方がこれだけ多くいることを学びました。そして、まだまだ知らないことが多くあることも気が付きました。(テーマ型団体)

なかなか見えてこない、子ども、あるいは青少年などの実情について、知ることができるいい機会となっている。(テーマ型団体)

支援を継続するために団体内で情報の共有と同意を得る必要性と、近隣団体との連携も必要と気付きました。(テーマ型団体)

地域の中で連携することで、フォーマル、インフォーマルの両面で地域をカバーできる。(テーマ型団体)

様々な人がそれぞれの立場で子どもについて考え、支援につながる行動をしている。その思いをきくことができた。(行政)

子ども支援やまちの取り組みなど近い分野で活動していても、お互いの活動内容や想いは思った以上に共有されてないということを改めて実感しました。円卓会議の場で様々な活動をしているかたと実際に顔を合わせてお話を伺うことで、活動を知ることができると同時につながりができる場があることがとても大切ということを学びました。(行政)

多くのケースの課題の複合性。事件・事故が起きる前の多くの機関・ワーカー等による、家族単位への予防的取り組みの必要性。(行政)

それぞれの立場から子どもへの目配せが違い、親御さんへの関わりも違ってくるのが分かりました。(地縁型)

⁶ 2021 年 2 月 15～22 日に実施したインターネットを用いた円卓会議参加者アンケート。回答数 25 件。回答者属性は地縁型 16.7%、テーマ型 45.8%、行政 33.3%、社協 4.2%。

参加者の組織や現場へのインパクト

「円卓会議があったことで、ご自身の組織、現場のどのような事業形成につながりましたか？また、具体的な事業形成につながらなくてもどのようなプラスのインパクトがありましたか？」との問いには次のような回答がありました。円卓会議でのつながりをきっかけに、協力や連携ができるようになってきています。

新たな事業形成には至っていないが、そもそも組織として子ども支援の事業があまりない中で、協力することはできるようになってきている。(社協)

支援活動を更に拡大し実のあるものにするために、円卓会議に参加した他の団体とも連携した活動を考えてみたい。(テーマ型団体)

社内で子ども食堂への何らかの参画をしようという話がちょうどあり、実際関わっている方のお話が聞けて参考になりました。(テーマ型団体)

私が所属する組織は、豊島区の子ども達への支援を続けているが、支援を継続的に行う意義を見いだせた。更に大きな支援につなげられるよう、同じような組織との連携も考えてゆきたい。(テーマ型団体)

互いの現場の見学や情報交換が進み、日頃から連携できる団体が増えています。(テーマ型団体)

組織の活性化、公務員の既成概念を考え直すきっかけなど。(行政)

子どもたちへの支援の在り方について再考し事業の内容に反映させることができプラスになった。事業自体はコロナ禍でかなり縮小。(行政)

多くの関与者が同様な問題意識を共有していることがわかった。今後、児童相談所設置も予定されている中で、豊島区ならではの、新たな子ども・家庭へのアプローチが必要であるとの思いを強くした。(行政)

1対1でのやりとりでは物事が進みにくいときに、ちょっと違った角度の第三者として入ることで一歩前に進めるのでは、という経験がありました。円卓会議で課題を自然に共有できる環境があつてこそだと感じました。(行政)

待つことだけでなくこちらから訪問して身近な相談役となることや、物品を提供する事だけでなく、そこからどのような環境づくりが出来るかを学べた。(地縁型団体)

円卓会議の利点

「子ども支援の課題を踏まえて対応策を検討する場として、子ども・子育て会議などの会議体がありますが、それらに比べて円卓会議の利点はどのような点だと考えますか？」との問いに対し、インフォーマルな会議体であることにより、いろいろな立場の人が自由に意見を言うことができ、新たな活動、施策形成につながることを示唆されました。いくつかの回答を紹介します。

円卓会議はインフォーマルな会議なので、だれでも自由に意見が言えるところがいいと思う。(行政)

柔軟さ。(行政)

行政や社協が主導する会議体は、方向性が既にある、それに対する意見を言う場、という形にどうしてもなりがち。円卓会議は、いろいろな立場から現状を共有し、それをもとにこれからのことを考えて、行動に移すことができる場だととらえている。(社協)

具体的なケース、(顔の見える)一人・一家族の問題を検討することで帰納的に課題にアプローチする点。最近では区の会議においても、ケーススタディからの機能的な抽出を入れ込む取り組みにより、部分的にはその点を補う努力もされているが、どうしても全体としては各種数値的なデータや法制度など既成の枠組みから課題・施策を生み出さざるを得ない面がある。したがって、およそトップダウン的な施策展開になる中で、本円卓会議に集まる異なる立場の多くの関与者により、官製ではない「ケース検討会議」を行う中で、ボトムアップ的な施策提言がされていくことが貴重なことではないかと思う。(行政)

公の会議体よりもざっばらんに話が出来るのがよいと思います。
また、行政の取組だと公平、平等などの観点を外すことができず、十分な体制が組めない場合にどうしても機動力が弱くなります。民間は出来る範囲で出来ることを行う、という考えで動けるため、機動性に優れます。相互の優位性を活かし、補完をしながら課題に向かっていけると、より網の細かいセーフティネットが構築できると考えます。そのような理想の形を考える場に円卓会議はなるのではないかと期待しております。(テーマ型団体)

決めるべき議題があり参加者構成も固定されがちな会議体と比べ、想いや目的を軸に様々な立場のかたが参加でき、日頃思っていることなどを自然に共有できる場だと思います。事例を一緒に考えることでそれぞれの取り組みや考えに触れることができ、それが支えあいやすい関係づくりにつながっていると感じます。(行政)

第4章 地域づくりのカギ

ここまで「地域がつながるプロジェクト」の形成過程や活動の様子、これを実現させる素地となった取り組みについて記述してきました。これらはフォーマルな制度の利用とインフォーマルな支え合いを個別支援のなかでつなぎ合わせ、地域づくりとも連動させていくコミュニティソーシャルワークの実践でもあります。豊島区におけるこれら一連の取り組みは、子どもの貧困に対応するための地域での子ども支援活動として注目されがちですが、その全体を貫いているのは地域づくりでした。そして、この地域づくりこそが豊島区における一連の取り組みの特徴と言えるのではないのでしょうか。それは裏を返せば、地域づくりの発想をもたずに子ども支援事業が行われるのが一般的であるということでもあります。地域づくりはどこから始めればよいのかわからず、手ごわいということもその理由としてあるのではないのでしょうか。そこで、最後のこの章では、豊島区におけるこれらの取り組みから学ぶ地域づくりのカギとして6つのポイントを挙げたいと思います。

Point 1

人間関係でつながる

地域づくりのカギの1つ目は、地域に住み働く人と人がそれぞれの立場や肩書がありながらも、一個人として知り合い、相互に気にかける間柄になる、あるいは共通の目的をもつ間柄になるということです。そういった人間関係づくりにも、日常生活圏での近所付き合い、同じ活動をする仲間づくり、公民の関係団体間の関係づくりと、いくつかのバリエーションがあります。

(1) 近所付き合い

地域のなかで孤立しがちな人たちが近所の人（訪問員）と知り合いになり子育てトークができるような関係づくりを地域の中で多発的に展開し、適度な近所付き合いがある地域をつくるのが「地域がつながるプロジェクト」でした。日常生活圏でのつながりの回復や創出が、社会的孤立が課題となっているコミュニティにおける地域づくりのカギとなります。

(2) 思いを共有する仲間

子どもを孤立させない地域づくりのアクターとなった訪問員たちの活動開始当初の思いや活動を通しての経験はそれぞれ異なり、活動も個別に行うものでしたが、活動での経験

や気づきを共有し、学び合うことで、地域を共につくる仲間になっていきます。このような仲間づくりは、自分たちの気づきをもとに次のステップを主体的に創り出す起点になるため、地域づくりにおいては意図的に行っていく必要があります。

「地域がつながるプロジェクト」では、まず訪問員とコーディネーターの栗林さんのつながりが形成され、その後、3月に行った訪問員座談会で訪問員同志の学び合いがあり、仲間づくりの第一歩となりました。2021年度はより多くの訪問員たち同志が知り合い、仲間意識をもてる関係になることをめざせるとよいでしょう。地域に住み、地域の課題をよく知る住民の集団的な力がそこに生まれ、地域をより安心に、住みやすくするための当事者目線の活動や政策提案の力となっていくはずです。

（３）公民のキーパーソンのつながり

日常生活の場でのつながり、同じ地域活動に取り組む仲間のつながりに加え、区内で活動する様々な団体や肩書を背負う公民のキーパーソン同志の関係づくりも、地域づくりに非常に有効であることが円卓会議の取り組みから示されていました。「豊島みんなの円卓会議」には、日常の地域活動を通して実情をよく知るキーパーソン、これから地域活動を展開していきたいと考える民間団体のキーパーソン、公的な施策を担当するキーパーソンが集まりました。名刺をもたず、公開記録も取らないというルールを設定したことで、公的な役職を担っている人でも、地域に係わる一員として参加できる、敷居の低い、インフォーマルな会合の場を創り出すことに成功したのです。

そこでは、それぞれがどのような活動をしているのか、どのような制度があるのかといった情報共有にとどまらないところが重要です。どのような思いで活動しているのかを知り合うなかで各参加者が共通の思いを見出すことや、地域にある具体的な課題を共通認識にし、どうすればそれを克服できるのかアイデアを出し合う共同作業を通して、地域課題をともに解決する当事者意識を共有できるようにすることが重要です。

Point 2

関係性が積みあがる活動展開を意図する

地域づくりのカギの２つ目は、地域拠点での学習支援や子ども食堂といった活動でつながった人間関係を活かして、コロナ禍でさらに困窮する家庭に地域拠点で食料を配布する活動をし、それに協力してくれた人たちとの関係を活かして、今度は気になる子どもの家庭訪問をする、というように関係性が積みあがるよう意図して活動を展開することです。一つの活動をしてそこに係わる人たちの関係性がその場限りになるのではなく、活動を通して共有した思いや気づきを礎として、次の課題に取り組んでいくのです。そうすることで、そこに係わる活動仲間のすそ野が広がり、また、地域の課題をよく知る住民の集団的な力を形成していくことができます。

Point 3

人がつながるために物を活用する

地域づくりのカギの 3 つ目は、人と人がつながる必然性を創り出すための工夫です。近所付き合いが失われている地域で人と人が出会う場をセッティングするのはそう簡単ではありません。とりわけ訪問者への警戒感が強い都市部の住宅街ではなおさらです。見知らぬ近所さんの訪問を受け入れやすい工夫として、「プレゼント」はこの「地域がつながるプロジェクト」において絶大な効果を発揮しました。生活困窮家庭への食糧支援という、欠乏を満たすための資源提供とは一線を画し、人と人がつながる機会を創り出すために物を活用するという発想が実はカギなのでした。つながるための魅力的な物（時にはイベント）は地域づくりのために必要不可欠なアイテムとして認識する必要があるでしょう。

Point 4

住民主体の基盤となる組織づくりを意図する

地域づくりのカギの 4 つ目は、住民主体の基盤となる組織づくりを意図的に行うことです。すでに住民の集団的な力の重要性について触れましたが、地域におけるボトムアップの力がたまっていくのは住民が主体的に運営する組織です。WAKUWAKU は、自分たちの活動の現場で見つけた課題に取り組むことを続けてきました。自分たちに身近な場所を活用して、プログラムなどを企画、運営する組織にそのメンバーたちの主体性の基盤が培われ、経験値がたまっていくのです。こういったことに取り組む組織を地域の中で多様な形で育むことで地域づくりがより豊かになっていくはずです。

ここで意図する住民主体の基盤となる組織は、制度的なサービス事業の運営を規定に忠実にを行うことを基幹に据える組織とは異なることを明確に理解しておく必要があります。「地域がつながるプロジェクト」は区の委託事業の形をとったため、その規定にのっとった運営がなされていましたが、WAKUWAKU は委託事業を基幹に据えているわけではありません。

日本の福祉領域では困難な状況におかれた人々が当事者組織や住民組織を作って共同作業所、共同保育所、宅老所などの主体的な活動を生み出し、また、制度的なサービスを求めてソーシャルアクションを行ったことで、様々な福祉サービスが制度化されてきた歴史があります。ところが、福祉サービスが制度化され、自治体からの委託という形で民間団体がサービス提供を行う流れが 1970 年代頃から主流になっていきました。委託事業が組織の基幹的な事業になると、徐々にその組織の主体性が弱まっていくことは当然の帰結でした。

したがって、自分たちの気づきや思いを出発点にプログラムなどを企画、運営するスタイルを大事にする文化を地域の中で育むことが地域づくりのカギであると言えます。こう

した地域の団体があるからこそ、多様性のある円卓会議を有意義に開催することができるのです。このようなスタイルの民間組織を社会の中で育てていくためには、委託費に依存せずとも組織運営ができるよう、民間の助成金が日本でも増えていく必要があるでしょう。

Point 5

リーダーを育成する

地域づくりのカギの 5 つ目は、リーダーを育成することです。リーダー養成には 2 つの側面があります。1 つは、活動を通して学びや気づきを得た人がリーダーとなって新たな活動やグループを立ち上げていく起業家的リーダーの育成です。WAKUWAKU の活動にボランティアとして参加していた人が別団体を立ち上げて子ども食堂をはじめ、WAKUWAKU と連携しながら活動をしているのがその例と言えます。豊島みんなの円卓会議もそのようなリーダー育成の性質をもっていると言えるでしょう。

もう 1 つは、組織運営や事業を安定、充実、拡充するために、企画運営を担うリーダーや活動に参加するメンバーをサポートするリーダーを育てていくものです。例えば、プロジェクトのコーディネーターを育成し、区をいくつかのエリアに分けてエリアコーディネーターを配置していくといったようなイメージです。このようなリーダー育成を常に念頭に置きながら地域づくりを行うことで、多様な世代のリーダーが生まれ、地域づくりを引き継いでいくことができます。リーダー育成の発想をもたない地域活動や市民活動は閉鎖的になったり、後進に引き継ぐことができず、衰退します。

Point 6

専門機関と連携する

地域づくりのカギの 6 つ目は、専門機関と連携することです。これは福祉活動を主軸においた地域づくりにおいて言えることです。地域住民で取り組む子育て支援活動などは近所付き合いをベースにしたインフォーマルな支え合いです。困難を抱え孤立しがちな子どもや家庭の生活を支えるには、インフォーマルな支え合いだけではなく、公的な給付や制度的サービス利用、専門職による支援が必要なことがあるため、専門機関との連携の仕組みづくりが不可欠です。「地域がつながるプロジェクト」は訪問員が毎月の見守り活動での所見を区に報告する形で連携を行うものでした。

以上、「地域がつながるプロジェクト」につながった豊島区での一連の取り組みをふまえ、地域づくりのカギを 6 つ挙げました。これらが豊島区や他の地域での今後の地域づくりの参考になればと思います。

資料編

1. 豊島区支援対象児童等見守り強化事業実施要綱

令和2年10月26日

子ども家庭部長決定

第1章 総則

(目的)

第1条 この要綱は、「子どもの見守り強化アクションプラン」の取組を一層推進するため、民間団体等が、要保護児童対策地域協議会の支援対象児童等として登録されている子どもや、地域の中で支援を必要とする0歳～18歳未満の児童のいる世帯及び特定妊婦のいる世帯を訪問するなどし、食材の提供等を通じ、児童及び特定妊婦の状況の把握や見守り体制の強化を図ることを目的とする。

(事業の種類)

第2条 区長は、前条に規定する目的を遂行するため、次の各号に定める事業を実施する。

- (1) 毎月1回、訪問等により子ども等の状況の把握
- (2) 毎月1回、食材等の提供(家庭訪問及び拠点にて当該世帯の子どもを確認後、提供する。)

(実施方法)

第3条 区は本事業を委託により実施するものとする。

2 前項の規定により委託を受けた事業者(以下「事業者」という。))は、事業の実施に当たり、訪問等を行う支援員(以下「支援員」という。))の募集・選定・派遣調整等を行う管理責任者を配置すること。

3 支援員は、次の各号のとおりとする。

- (1) 子どもの福祉の向上に理解と熱意を有すると認められ、子ども関連の研修を受け現在活動している、子どもや保護者に対して適切な生活支援ができる者。
- (2) 支援対象児童等への対応に十分に配慮するとともに、個人情報の保護を遵守できる者。
- (3) 事業実施にあたり事前に事業に必要な研修を受講した者。

4 管理責任者は、次の各号のとおりとする。

- (1) 支援員に対し、事業に必要な研修を実施すること。
- (2) 事業により知り得た個人情報について、守秘義務について事業に携わる者全員に個人情報の保護を十分に遵守させるよう指導する。
- (3) 支援対象児童等への対応に十分に配慮し、個人情報の保護を遵守できる者。
- (4) 支援員が第三者へ事業を委託することがないよう監督する。
- (5) 支援員については、管理責任者が責任をもって選定する。
- (6) 事業の進捗状況を随時把握し、区へ報告すること。

5 区は事業者に対し、支援対象児童等の様子や家庭状況について報告を依頼し、適宜報告のあった情報については必要に応じて関係機関が情報共有を行うとともに必要な支援・措置につなげる。

(実績報告)

第4条 事業者は、毎月10日までに、前月分の実績を報告するものとする。事業終了時には事業実施報告書等を提出するものとする。ただし、事故の発生及び早急に区の支援を必要とする場合は適宜報告を行うものとする。

(事業に従事する者の責務)

第5条 事業者は、本業務の委託契約書に定める事項を遵守しなければならない。

第2章 支援対象児童等見守り強化事業

(内容)

第6条 支援対象児童等見守り強化事業(以下、「事業」という)は、令和2年11月から令和3年2月にかけて、支援対象児童等や特定妊婦のいる世帯のうち、見守りや支援が必要と思われる世帯を対象に案

内を配付し、申込みのあった世帯に対し、事業者が毎月 1 回訪問または拠点場所にて食材の提供を行いながら、子ども等の状況の把握をし、子供の見守り体制の強化を図ることをその内容とする。

(事業の対象者)

第 7 条 対象者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- (1) 要保護児童対策地域協議会の支援対象児童等として登録されている子どものいる世帯及び特定妊婦のいる世帯。
- (2) 生活困窮や養育に不安を抱え、支援を必要とする特定妊婦や 0 歳から 18 歳未満の子育て世帯。
- (3) その他特に区長が必要と認める者。

(申請)

第 8 条 要保護児童対策地域協議会の支援対象児童の家庭には区から書類を直接配付。申請希望者は事業者に申請する。

支援を必要とする特定妊婦や 0 歳～18 歳未満の子どものいる世帯については、区が示した基準を満たした世帯に対しての名簿を事業者が作成。区は事業者が作成した名簿について、支援対象児童との突合作業を行う。その後事業者が書類を配付。申請希望者は事業者に申請する。

(決定)

第 9 条 事業者は前条の規定による申請書を受付後、事業者が利用者名簿を作成し、区へ報告する。なお、疑義があるときは区と協議する。

(支援)

第 10 条 事業者は、毎月 1 回支援員による家庭訪問及び区内拠点での食材等提供時に児童または特定妊婦の安全確認を行う。

物資のみの提供で、安全確認が漏れることのないように、管理責任者が支援員の訪問状況等を把握し、記録に残す。

(支援の変更)

第 11 条 次の各号に挙げられる、事業の対象者でなくなった利用者に関しては、事業者は支援の終了について区に場合は区に報告・承認を得たうえで支援を終了できる。

- (1) 区外に転出した場合。
- (2) 対象児童等が施設入所等で不在の場合。
- (3) 対象家庭から支援の終了希望が出た場合。
- (4) その他支援の必要が無くなった場合。

(利用料)

第 12 条 本事業の利用料は無料とする。

(実績報告及び請求)

第 13 条 事業者は実施した事業について区長に報告及び請求するものとする。

2 区長は前項の請求に基づき、委託料を支払うものとする。

3 本事業に要する費用の一部または全部について国が別に定めるところにより補助するものとされている。ただし、他の国庫補助金等の補助を受けて実施している既存事業を活用して事業を実施する場合は本事業の補助対象とならない。

附 則

1 この要綱は、令和 2 年 11 月 1 日に施行する。

2 この要綱は豊島区事案の決定等に関する規程(平成 17 年豊島区訓令甲第 2 号)第 3 条及び第 4 条の規定により子ども家庭部長の決定区分とする。

2. 「地域がつながるプロジェクト」参加案内チラシ



ち いき

地域が つながる プロジェクト

コロナ禍の中、如何お過ごしでしょうか。毎日の子育ては大変なことと思います。
 訪問員が、ご家庭に月に1回、プレゼントをお届けします。
 不審者等も出現するご時世、訪問員がお子様の名前と顔を覚えて、外で会った時も見守れるよう
 にしたいと考えています。「地域がつながるプロジェクト」ぜひご利用ください！

プレゼントの内容

11月

**ご飯がすすむ
極ウマおかず**
など

12月

**クリスマス用の
魅力的なスイーツ**
など

1月

**お正月のおもちを
中心に…**

2月

**バレンタインに
ちなんだ
チョコレート** など

【実施期間】

11月～2月、毎月1回

※訪問時にお子様に「こんにちは」と挨拶させてください。
お家でない方がいいという方は、近くの区民ひろば等で
会うことも可能です。

【本プロジェクトの対象者】

このチラシが直接届いた
豊島区に住まわれている家庭



訪問員はこのホルダーを
下げています。

【お申込み方法】



こちらのQRコードの申込フォーム
よりお申し込みください。
<https://forms.gle/6QQhLPzv8RzAtRho6>

【お問い合わせ】

NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
〒171-0014 豊島区池袋3-52-21
TEL 090-3519-3745 FAX 03-3986-4556 Eメール info@toshimawakuwaku.com
●実施 NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク ●事業主管 豊島区子育て支援課

申し込み締切

11/3

(火)

3. 「地域がつながるプロジェクト」 申込書（チラシ裏面）

もうしこみしょ

申込書

※QRコードで申し込めない方は、こちらの申込書を郵送またはFAXしてください。

なまえ 名前			
じゅうしょ 住所			
でんわばんごう 電話番号	メール アドレス		
かぞくこうせい 家族構成	※同居されているご家族すべてご記入ください。 例：母あゆみ、祖母みち子、太郎（13才 中学1年生）、花子（9才 小学3年生）、かおる（4才 保育園）など。		
ほうもんきぼうにちじ 訪問希望日時			
保護者が不在の場合でも、お子さんのみでの受け取りも可能です。 なるべくお子さん全員がそろっている日時を11月12日以降でご指定ください。 ※訪問員より、事前に訪問する日時のご連絡をいたします。			
だいいちきぼうにちじ 第一希望日時	がつ 月	にち 日	（ : ~ : ）
だいにきぼうにちじ 第二希望日時	がつ 月	にち 日	（ : ~ : ）
だいさんきぼうにちじ 第三希望日時	がつ 月	にち 日	（ : ~ : ）
その他ご要望等ございましたらご記入ください。			

はんにせう
本事業

については

はんにせう
豊島区

が

はんにせう
NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

（以下

はんにせう
事業者

）に委託し実施

します。

はんにせう
本申込書

に記入した個人情報

は、事業者が収集し、本事業の目的にのみ利用させていただくもので、

はかに
他の目的に

はんにせう
利用されることは一切ありません。

はんにせう
なお、本事業は豊島区からの委託のため、事業者は豊島区に

はんにせう
事業の報告を

はんにせう
いたします。

はんにせう
必要に応じ、事業者からの情報を豊島区が把握させていただきます。

はんにせう
上記内容について、同意します。

れいお
令和

ねん
2年

がつ
月

にち
日

はんにせう
保護者氏名

いん
印

4. 「地域がつながるプロジェクト」訪問員募集案内

おせっかいさん大募集！

このたび、豊島区との協働で、地域の子どもを見守る事業をおこないます。

11月から2月まで、毎月1回同じ家庭を訪問します。訪問のタイミングは、おせっかいさんと訪問先との都合で決めます。豊島区から案内されたひとり親家庭など困難を抱えるご家庭の中で、希望された家庭に伺いますので、拒否されることはありません。

お米券などを持って、訪問したときに、子どもの顔を見て「こんにちは」と一声かけて、元気であるかを見守る事業です。特に相談にのったりする必要はありません。なるべくお住まいの近所の方をお願いします。訪問する家庭数はおせっかいさんの数によって変わってきますが、8家庭程度を予定しています。

有償ボランティアとなります。豊島区で初めての試みである地域の子どもを見守る事業にお力を貸していただきたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

【申込み先】

NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

メール：info@toshimawakuwaku.com

おせっかいさん希望と明記の上、①住所②氏名③電話番号をお送りください。

いただいた個人情報は本事業以外には使用いたしません。

ご質問のある方は下記にお電話ください。

この報告書は公益財団法人麒麟福祉財団の助成金を得て作成しました。

団体名 特定非営利活動法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

住所 〒171-0014 東京都豊島区池袋3-52-21

電話 050-5526-1229 火曜～木曜 10時～17時

E-mail info@toshimawakuwaku.com